青春短編声劇　アオイロ
ボイスドラマシリーズ

「アオイロ
ロングバージョン」

作：ササキタツオ

■形式
声劇（声で演じる芝居）
朗読劇
ボイスドラマ

■ポッドキャスト配信中
（リンクより視聴可）
https://anchor.fm/story-office

■梗概・全２４作品の短編戯曲集。
「春チョキ！」
「おやすみライブラリー」
「雨の恋」
「恋扇子」
「タナバタ・ディスタンス」
「君色トランペット」
「君は夢を見ている」
「炭酸ダイナマイト」
「夏を感じて」
「ペンギンダッシュ！」
「なりきってゴースト」
「夏の涙」
「真夏の紙飛行機」
「今夜だけは」
「あべこべ連打」
「ゴミ捨てフレンズ」
「ギリで駆け込んだトイレに貞子がいた」
「ホウレンソウ」
「渦巻ユア・ネーム」
「昼下がりの天使様」
「白く深く」
「言葉にできない私たち」
「忘れられない思い出し笑い」
「青空サテライト」

■「春チョキ！」

《人物》

砂川　将人（１６）高校２年生。

堀　茜（１６）高校２年生。

《本編》

砂川君のＭＯ「いつまでも青春は待っていてくれない。そう気づいたから……。俺は、学校からの帰り道、全力ダッシュで君を追いかけた！」

砂川君「(息を切らしながら叫ぶ)堀さーん！」

堀さん「砂川君？　どうしたの？」

砂川君「(呼吸を整えながら)いや、その……やっと追いつけたから！」

堀さん「えっ？　私に？」

砂川君「う、うん！」

堀さん「変な砂川くん」

砂川君「あの……その！」

堀さん「なに？」

砂川君「一緒に帰ってもいいかな！？」

堀さん「え……あ、うん……いいけど」

砂川君「よかった！」

砂川君のＭＯ「戸惑う君の横に並んで一緒に歩き出す。ふー。はー。すー。はー。呼吸を整えて、心の準備をする」

堀さん「砂川君、息切れしすぎ」

砂川君「(呼吸を整えつつ)そう、かな？」

砂川君のＭＯ「いよいよだ。いよいよ言うんだ。言うんだ。言うんだ！　落ちつけ。緊張するな。吹き飛ばせ。そうだ。よし。行くぞ！」

砂川君「(緊張から言葉が詰まりボゾボゾと)好きです……！」

堀さん「え？　何？」

砂川君「(さらに早口で口ごもりながら)堀さんの事が好きなんです！」

堀さん「え？　なんて言ってるか、よくわかんないよ？　落ち着いて」

砂川君「(恥ずかしくて、さらに早口で)だから付き合ってください！」

堀さん「(笑って)ダメだ！　全然わかんない！」

砂川君のＭＯ「な、ななんてことだ！　俺の言葉は堀さんには届かないのか！？　それなら！　と、俺は右手を堀さんに差し出した。堀さんはその手を見て、ハッとした表情を浮かべ、ゆっくりとジャンケンのチョキを返してきた。チョキ！？　しまったぁ！　俺はパーを出したと思われたのかっ！」

堀さん「私の勝ちだね！」

砂川君のＭＯ「俺は堀さんのユーモアに感動しながらも、あまりに恥ずかしくなって、パーの手で顔を隠した」

堀さん「変な砂川君」

砂川君のＭＯ「あぁっ！　俺の想いは届かないのか！？　諦めるしかないのか！？　すると、今度は堀さんが手を差し出してきた。俺は思わず、それに、チョキを返した！」

堀さん「これでおあいこだね！」

砂川君のＭＯ「ううっ。しまった！　なんてことだ！　本当のジャンケンになってしまったじゃないか！」

砂川君「ほ、堀さん……」

堀さん「一勝一敗だから、あと１回勝負だね！」

砂川君のＭＯ「ああ。そう言ってほほ笑む堀さんの姿に完全にノックアウトされた俺は、チョキの手で自分の顔を突き刺していた」

堀さん「え！？　砂川君？　大丈夫？」

砂川君「だ、大丈夫です……！」

堀さん「じゃあ、もう一回！　せーの！」

砂川君のＭＯ「今度は、お互いチョキを出す。ああ、なんってことだ。ホントもうダメだ」

堀さん「そおか。今日はおあいこだね」

砂川君「はい……」

堀さん「じゃあ、また明日勝負しよ！」

砂川君のＭＯ「そう言って歩き出す堀さんに慌ててついていく。え？　また明日！？　明日って！？　完全にタイミングを逸したけれど、また明日リベンジできる！？　なんだかよくわからないけど、俺の心は高鳴っていた」

（おしまい）

■「おやすみライブラリー」

《人物》

濱田　航（１７）高校２年生。

塩野　真央（１７）高校２年生。

《本編》

航のＭＯ「眠い。本当に眠い。５月の、放課後の図書室がこんなに地獄だったなんて俺は知らなかった。ふと隣の席を見ると、さっきまで一緒に勉強していたはずの真央がすやすやと寝ていた」

航「真央！　まおさーん！」

航のＭＯ「真央は起きる気配もない」

航「真央！　ったく、起きねえ……」

航のＭＯ「頭がボンヤリする。俺も寝るか？　いやいや勉強！　それにしても、真央のその寝顔。ああ、油断大敵だな。俺も眠っていたら、コイツに寝顔を見られるところだったのか！」

真央「ん、んん……（起きて）あれ？　私寝てた？」

航「もう、ガッツリ」

真央「うそー！？」

航「ホント（笑う）」

真央「え？　なに？」

航「いや、顔に、寝あとついてる！」

真央「えーっ！　ウソ！？」

航「シャーペン下敷きにして寝てたんだろ、刀傷みたいになってるぞ」

真央「えー！？」

航のＭＯ「真央は手鏡で、自分の顔を見て世界の終わりのような絶望的表情を浮かべた。ねぼすけ刀傷、これは、ホント、爆笑モノである！」

真央「さ、最悪だ……！　ちょっと、航、こっち、見ないでよ」

航「だって（と笑う）」

真央「ちょっとお！」

航「ま、別にそのうちなおるだろー」

真央「だからって見ないでよ」

航「じろじろー」

真央「もう！　ほんと、なおらなかったらどうするの？」

航「（平然と）いや、なおるだろ」

真央「その言葉。責任持てる？　もしなおらなかったら、責任取ってくれるの？」

航「え！？　俺が？　いや、さすがに無理。っていうか、眠っていた真央の自己責任だろ」

真央「ああ。全く……。そもそも私が寝ないように、ふつう見張るでしょ！？」

航「は？　え？　俺のせい？」

真央「だって、それが友情！　勉強会をするメリットじゃん！　お互いに頑張ってるなー。お。眠そうだぞ。寝てはダメダメ。一緒に頑張ろう、って」

航「いや……俺、自分の問題解くのに集中してたし……」

真央「あっ！　そんなこと言って、航も実は眠かったんでしょー？」

航「はあ？　んなことねーよ」

真央「そんなこと言って、ガチで寝てて私より先に起きただけなんじゃないの？」

航「問題解いてたって」

真央「ホント？　どれどれ。あーっ、ノートの字、グニャグニャじゃん！　睡魔に襲われていた証拠ですなー。嘘はいけませんねえ、嘘は！」

航「……確かに眠かったよ。でも、俺は、お前みたいに油断しないから」

真央「油断って？」

航「油断は、油断だよ」

真央「よくわかんない」

航「わかんなくていいよ」

真央「ふーん。じゃあ、油断しないなら、もう少し大丈夫だね」

航「え？　なにが？」

航のＭＯ「真央は再び寝る姿勢を整えた」

真央「んー。私まだ眠いので、１時間したら起して！」

航「は？　また寝るのかよ！」

真央「睡眠学習だよ。効果あるの」

航「いやないだろ」

真央「それじゃあ、おやすみー」

航のＭＯ「そうして真央は目を閉じた。ホント、油断大敵だな、この寝顔。でも。俺はその時、気づいてしまった。他の奴にこいつの寝顔を見せたくないって……。全く、仕方ない。あとで起こしてやるか！」

（おしまい）

■「雨の恋」

《人物》

森川　ひな（１７）高校２年生。

小田　和人（１７）高校２年生。

《本編》

ひなのＭＯ「しっとりとした雨が静かに降る６月の朝。高校の昇降口で体についた雨粒を払う。６月の雨は本当に嫌いです。だって、あなたを近くに感じてしまうから……」

小田「森川。おっす！」

ひな「小田君。おはよ」

小田「今日も早いな」

ひな「小田君こそ、朝練？」

小田「まあな。でも、この雨だからまた筋トレルーティンかな」

ひな「頑張って！」

小田「あ。森川。ねぐせ！」

ひな「え？」

小田「クルクルってなってる！」

ひな「（手で触って）あ。これは……！　寝ぐせじゃなくて、くせ毛です」

小田「くせ毛？」

ひな「そう。くせ毛なんです。今朝ちゃんとセットしたのになあ……」

小田「女子は大変だな」

ひな「小田君はいいよね。野球部おそろいの坊主頭」

小田「坊主頭には坊主頭の苦労があるんだよ」

ひな「そうなの？」

小田「メンテナンスが意外と面倒なんだよ。すぐ伸びてくるし」

ひな「そうなんだ」

小田「ってか、俺も、髪のばしたらくせ毛だから！　森川とは仲間だな」

ひな「えっ……イメージできない」

小田「だから、寝ぐせも個性だ！」

ひな「くせ毛だよ……！」

小田「（笑って）わりい、わりい」

ひな「もう……」

小田「じゃあ、朝練行ってくるわー」

ひな「頑張ってー！」

ひなのＭＯ「（ため息をついて）彼は私の気持ちに全く気づいていません。それはとても悲しいことだけど、自然な形で彼と接することができるなら、それはそれで幸せなことなのかもしれません……」

ひなのＭＯ「静かな雨は、今日も放課後まで降り続きました。野球部の練習も中止でしょうか。私は昇降口で止まない雨空を見上げていました」

小田「おっす、森川！」

ひな「小田君」

小田「帰らねーの？」

ひな「雨弱くならないかなって……」

小田「まあな。そろそろカーっと晴れてほしいよな」

ひな「だよね」

小田「あっ、森川。また髪はねてるぞ。ねぐせ！」

ひな「小田君。これは……くせ毛だって」

小田「そうだった」

ひな「それにもう仕方ないの。これは個性だから。いいの！」

小田「ふーん」

ひなのＭＯ「その時、珍しく小田君と視線が合いました。なんだか急で、照れくさくて、私はさっと視線を外しました。それは小田君も同じだったようです……」

小田「なあ。森川……」

ひな「え……。な、なに？」

小田「いや、その……そうそう。週末、練習試合あるんだけどさ……」

ひな「うん……」

小田「その試合の日が晴れるように。ついでに、うちのチームが勝てるように、祈ってくんない？」

ひな「え？　私が？」

小田「なんか森川が祈ってくれたら、天気は晴れるし、勝てる気がすんだよな！」

ひな「え……私、そんな力ないよ……」

小田「あるある、寝ぐせパワー」

ひな「くせ毛だって」

小田「頼む！　その森川パワーで！」

ひな「……無理だよ」

小田「よろしく頼んだからな！」

ひなのＭＯ「彼はそう言って雨の中を走り去っていきました。雨は本当に嫌いです。だって、あなたをもっと近くに感じてしまうから……。私はあなたのために、降り続く雨の空に向かって静かにお祈りをしました。どうか、晴れますように！」

（おしまい）

■「恋扇子」
《人物》
河野　ひかり（１６）高校１年生。
持田　裕（１６）高校１年生。

《本編》
持田君「これは、彼女の忘れ物……？」
持田君のＭＯ「梅雨の合間の珍しく雨が上がった放課後のことだった。誰もいなくなった教室で、僕は君が机に忘れていった扇子を手に取った。君がいつも使っている花柄ピンクの扇子だ」
河野さん「持田君？　何してるの？」
持田君「こ、河野さんっ！」
河野さん「あっ。それ、私の扇子？」
持田君「あ……い……い、いえ、その……これは、僕のです！」
河野さん「え？」
持田君「僕の、扇子です」
河野さん「持田君の……？　花柄ピンク？」
持田君「はい……」
持田君のＭＯ「僕の人生は絶望の崖っぷちだ。こんなウソ、通用するはずもないのに！」
河野さん「すごい！」
持田君「え……？」
河野さん「私とお揃いだったんだね！」
持田君「え。あっ、そうなんですか……？　知りませんでした」
河野さん「あー！　わかったよ。彼女からのプレゼントでしょ？」
持田君「か、彼女なんていませんよ！」
河野さん「そうなの？」
持田君「そうですよ……」
河野さん「じゃあ、持田君って乙女系？」
持田君「それも違います。ただ、なんかセンスいいなって思って……」
河野さん「え？　扇子だけに？」
持田君「そ、そんなつもりじゃ……」
河野さん「持田君っておもしろい人だったんだね！　あんまり話したことなかったから」
持田君「そ、そうですね」
河野さん「ああ、私の扇子は一体どこだろ？」
持田君「あ、あの！　一緒に探します！」
持田君のＭＯ「ウソをついてしまった僕は、河野さんと一緒になって見つかるはずのない探し物をした。ああ。もうあとには引き返せないんだ！」
河野さん「見つからないな。おかしいな。どこやったんだろ」
持田君「大事なものだったんですか？」
河野さん「お気に入りだったから」
持田君「そうだったんですね……」
河野さん「うん……」
持田君のＭＯ「僕の心は罪悪感でいっぱいだ。本当のことを言おうか、言うまいか、言ったら彼女はどんな顔をするだろうか。きっと嫌われるだろう。嫌われる。それだけは間違いない。でも、それは絶対に嫌だ。だから、ウソをついたとは口が裂けても言えない！　ああ。どうしたら……！」
河野さん「どうしよう……」
持田君「諦めず、探しましょう」
持田君のＭＯ「僕たちは教室中を探し回った。でも、見つかるはずはないんだ！」
河野さん「持田君、ありがとう」
持田君「いえ。お力になれず……」
河野さん「よし！　同じのほしいから、持田君、一緒に買いに行かない？」
持田君「え？　あ、はい……。え……一緒に！？　僕ですか？」
河野さん「ダメ？」
持田君「ダメではないですけど……」
河野さん「あー、でも、お揃いの扇子持ってたら誤解されちゃうかな？」
持田君「ご、誤解ですか！？」
河野さん「まあ、でも、私は気にしないけどね！」
持田君「ぼ、僕も、です……！」
河野さん「それか、同じ感覚の持田君に一緒に見てもらえたら、もっと似合うのが見つかるかな」
持田君「僕のセンスなんて」
河野さん「一緒に選んで！　お願い！」
持田君「わ、わかりました……」
持田君のＭＯ「なんていう展開だ。河野さんには本当に申し訳ない！　でも、僕はこのウソを貫き通そうと決めていた。晴れ間に吹く風が梅雨明けの予感を運んできていた」
（おしまい）

■「タナバタ・ディスタンス」

《人物》

松尾　薫子（１６）高校１年生。

森本　豊（１６）高校１年生。

《本編》

薫子のＭＯ「好きな人に好きだとわかってもらうことってなんでこんなに難しいの！　もう７月なのにぜんぜん進展しない！　一歩も先に進めない！　なぜなんだーっ！」

森本「今日も疲れたなー」

薫子「今日も疲れたねー」

薫のＭＯ「高校で隣のクラスの森本君とは同じ文芸部。帰り道が一緒で本の趣味も似てたから、仲良くなるのに時間はかからなかった。でも、友達って距離が固定化してしまった！　一緒に帰れるのは嬉しいことだけど、これじゃ、友達路線・一直線だよ！」

森本「もうすぐタナバタだな」

薫子「そうだね」

森本「薫子は、願い事する人？」

薫子「うーん。しないかも。小学校の時以来、願い事なんて全然してないからなあ。森本君は？」

森本「俺もしない人。願い事って、いまいちピンとこないんだよ」

薫子「夢がないね、私たち」

森本「確かに」

薫子「夢がないのってちょっと寂しいかも」

森本「それも言えてる」

薫子「なんか願い事考えてみる？」

森本「うーん」

薫子「考えてみよっか」

森本「と、いっても、やっぱり思いつかない」

薫子「同じく」

薫子のＭＯ「森本君とは一緒に歩く歩幅が同じで、ずっとこうして歩いていられたらいいのに、って、それは願い事になるのかな？」

森本「そうだ。今日の薫子の作った歌、よかったよ。夏空の情景が頭に浮かんだし」

薫子「え。あ、ありがと！　照れるなー」

森本「お世辞だよ！」

薫子「お世辞なのぉ！？」

森本「本当は、嫉妬半分、うらやましさ半分ってところ」

薫子「森本君はいま小説書いてるんだよね？」

森本「まだプロット。俺、いつも設定でやめちゃうから。今度こそ最後まで書きたいんだよなあ」

薫子「どんなお話なの？」

森本「企業秘密」

薫子「えー」

森本「書きあがったら見せるよ」

薫子「じゃあさ！　七夕の願い事！　それにしたら？」

森本「え？」

薫子「最後まで書けますように、って」

森本「えー」

薫子「ダメかな？」

森本「それ、願い事ってより、目標って感じじゃね？」

薫子「あ、それもそっか……」

森本「そうだよ」

薫子「あ。じゃあ！　私がお願いするよ！　森本君が小説、最後まで書けますように、って！　これならいいよね？」

森本「なんだそれ」

薫子「いいじゃん！　一読者として、期待しておりますので！」

森本「うわ。すごいプレッシャーだし！　薫子と違って、俺、言葉にするの時間かかるし、期待にこたえられるように書くなんて、うまくできる気しないよ……」

薫子「ちゃーんと短冊に書いておくから。森本君！　頑張れ！」

薫子のＭＯ「ちょっとお節介だったかな？　でも、私にできることなんてこれくらいだ」

森本「よし！　わかった。じゃあ、お返しに、薫子がいい歌書けるようにって願いごと書くよ！」

薫子「え？　いいよ」

森本「こういうのはお互い様だろ」

薫子「なんか意味違う気がするけど」

森本「遠慮はしない」

薫子「はーい」

薫子のＭＯ「一歩も前進しない恋心はもうどうにかなりそうだ。でも、私たちはこうやって進んでいくのがいいのかなって思ったりして。今は私たちの距離は変わらないけど。いつか届くといいな、織姫と彦星が巡り合う、タナバタみたいに」

（おしまい）

■「君色トランペット」

《人物》

桜井　美穂（１６）高校１年生。

五十嵐　大悟（１６）高校１年生。

《本編》

美穂のＭＯ「夏の校舎に響く、トランペット。調子外れでまっすぐな音色が君だってこと。私にはわかる。今日も部活おわりの君がやってくるのを、偶然をよそおって待ち伏せしていた」

美穂「五十嵐君！」

大悟「おう！　桜井。お疲れー」

美穂「お疲れー」

大悟「あれ？　今日も、いま、帰り？」

美穂「うん！」

大悟「それは遅くまでご苦労様で」

美穂「五十嵐君も」

大悟「じゃあ、一緒に、帰るか？」

美穂「うん！」

美穂のＭＯ「いつも通りのこの流れ。私たちは一緒に帰る。高校から駅までの短い距離が私たち二人のお話コースだ」

大悟「桜井って、いつも何してるんだ？　もしかして、勉強？」

美穂「え……。まあ、図書室で本読んだり、勉強したり、かな」

大悟「すげえなあ」

美穂「そうかな？」

大悟「そうだよ」

美穂「そう？」

大悟「ホント、真面目だよなあ」

美穂「私、勉強できないから」

大悟「え！？　うそつけー。いつも成績、上の方じゃん」

美穂「人よりちゃんと勉強しないとできるようにならないって、わかってるから。地道な努力です」

大悟「そこが偉いよな。あー。俺も頭良くなりてえ。地道な努力とか超苦手だし」

美穂「でも、五十嵐君、トランペット頑張ってるじゃん」

大悟「まあ、それはなー」

美穂「調子はどう？」

大悟「それがさ、全然ダメダメなんだよな。俺、努力も才能もないのかも」

美穂「そんなことないよ。ちゃんと努力してるって。私にはわかるよ」

大悟「そうか？」

美穂「そうだよ」

大悟「桜井だけだよ、ホントそんなこと言ってくれるの」

美穂「そんなにダメなの？」

大悟「ダメ、ダメダメのダメ」

美穂「でも、高校から始めたんでしょ？　そこがそもそもスゴイところだよ。私だったら絶対無理って始める前から諦めちゃう」

大悟「新しいこと始めたかったんだよな」

美穂「すごいなあ」

大悟「でもさ。みんなと音がうまく合わせられないんだよな。それがすげーもどかしくって。現実は厳しいな」

美穂「五十嵐君のトランペット、素敵だと思うけどな！」

大悟「はあ！？　桜井、それはさすがに俺のこと、バカにしてるだろ！？」

美穂「私が好きじゃ、ダメかな？」

大穂「桜井に言われてもなあ……」

美穂「私じゃ不足？」

大悟「不足だな」

美穂「えー。音楽のセンスある方だと思うけどなあ」

大悟「それだと不安だな」

美穂「五十嵐君のファンだって言っても？」

大悟「え？　俺の？　どこが？」

美穂「それは……なんか勢いがあって、誰よりも力強くて、図書室からでも、あ、五十嵐君が吹いてる、ってすぐわかるとこ？」

大悟「それ……学校中に恥をさらしているってことになるな……」

美穂「いや、でもでも、とにかく、私は五十嵐君のトランペットのファン第１号だから」

大悟「たった一人のファンかあ」

美穂「まだいるかもよ？」

大悟「まさか」

美穂「それか、これから増えるかも！？」

大悟「桜井、やっぱりバカにしてるだろ」

美穂「してないよー」

大悟「あーっ！　なんか桜井にバカにされたら、逆にやる気出てきた。帰って練習しよ」

美穂「頑張って！」

美穂のＭＯ「私の声援なんてたいしたことないんだけど。少しは君の役に立てるといいな。君の奏でる音が好きなのは本当だから。まだ明るい夏の夕暮れに入道雲が輝いていた」

（おしまい）

■「君は夢を見ている」

《人物》

清水　浩紀（１７）高校２年生。

星　真子（１７）高校２年生。

《本編》

清水くんのＭＯ「光が差し込む高校の教室。いつも窓辺にたたずむ君は、青空がとってよく似合う、遠い別世界に住む人のようで。僕はそんな君をただ遠くから見ることしかできないでいた」

星さん「ねえ、清水君！」

清水くんのＭＯ「放課後、一人教室で勉強を続ける僕のところに、突然、彼女がやってきた。僕は彼女を直視できず、窓の外に視線を移した。青空に白い雲が流れていた」

星さん「清水君ってば！」

清水くんのＭＯ「僕は、一瞬、自分が呼ばれていることに気づかなかった。それぐらい、君が僕に関わることは、非常事態というか、イレギュラーな事であった」

星さん「清水くんー！」

清水くん「え……し、清水って、ぼ、僕のことですか！？」

星さん「ほかに清水ってクラスにいた？」

清水くん「いません……」

星さん「じゃあ、そうなんじゃないの？」

清水「ですかね」

星さん「それとも、私のこと無視したの？」

清水くん「ち、違いますよ！　ほ、星さんのことを無視だなんて……そんなことするわけないじゃないですか！」

星さん「なら、いいけど」

清水くんのＭＯ「君はそう言って、僕の真向かいの席に座って。こっちをまっすぐに見た。僕は、どうしたらいいのかわからず、君を遠ざけるように視線を逸らした」

星さん「視線をそらさない！」

清水くん「え……、そんなこと言われましても……。急になんですか……？」

星さん「さあ、なんでしょうー」

清水くん「な、なにか、僕に用ですか……？ぼ、ぼくは、い、いそがしいんで」

星さん「忙しいって、勉強？」

清水くん「そ、そうです……」

星さん「君は勉強すごくできるもんね」

清水くん「……」

星さん「今も一人で残って、明日の予習？」

清水くん「そ、そうですけど……」

星さん「なんでそんなに勉強、頑張れるの？」

清水くん「えっ……」

星さん「夢あるの？」

清水くん「夢ですか……」

星さん「そう。夢」

清水くん「それは……なんですかね……よくわかりません」

星さん「え？　自分でわかんないの？」

清水くん「そ、そうです……」

星さん「本当に？」

清水くん「夢なんて、別にありません……」

星さん「なーんだ。つまんない。私、君のことかいかぶってたみたい」

清水くん「え……？」

清水くんのＭＯ「君は何も言わずにくるりと僕に背を向けた。夢……。夢なんて僕にはない。その事実を君に突きつけられたのが、なんだか急に悔しくなった……」

清水くん「じゃ、じゃあ！　ほ、星さんには夢あるの！？」

清水くんのＭＯ「僕は思わず君に向かって叫んでいた！　しまった、クラスの宇宙人の僕が君に話しかけるなんて……。僕なんかみんなに話しかけちゃいけない存在なのに！」

星さん「私の夢？」

清水くん「は、はい……」

星さん「あるよ。聞きたい？」

清水くん「は、はい……」

星さん「私、先生になるのが夢なの」

清水くん「先生……？」

星さん「そう。先生。それでね、君みたいな夢がないっていう生徒に、夢を与えるのが私の夢」

清水くんのＭＯ「そう言い切った君は、窓辺に立って、外を見た。青空に溶けるような君の姿は、僕には本当に光り輝いて見えた」

（おしまい）

■「炭酸ダイナマイト」

《人物》

木村　紗良（１６）高校１年生。

吉岡　健一（１６）高校１年生。

《本編》

健一「紗良のバーカ！」

紗良のＭＯ「そうやって、いつも私のことをなにかとバカにする、健一よ。バカにされる私の呪いを思い知れ！　真夏のお昼の教室で私は猛烈に振った炭酸ペットボトルを準備して、何も知らない健一の席へ突撃した！」

紗良「健一！　これ、あげるよ！」

健一「え？　何？」

紗良「炭酸だよ！」

健一「それは見ればわかるけど」

紗良「健一、好きでしょ？」

健一「まあ。そうだけど。え……これ、紗良のおごり？」

紗良「もちろん」

健一「マジ？」

紗良「マジマジ。健一、この夏の暑さで喉乾いたかなーと思ってさあ」

健一「へえー。気が利くなあ」

紗良「でしょ！」

健一「サンキュ！」

紗良「いえいえ。いつもお世話になっておりますので」

健一「でも。ホント珍しいよな」

紗良「そう？」

健一「そうだよ。いつも１円単位で割り勘する紗良のキャラじゃないっていうか」

紗良「私ってそんなケチなキャラ？」

健一「ケチだろ」

紗良「ま、そうですけど……」

健一「ああ、雪でも振るんじゃないのか」

紗良「ひどーい」

紗良のＭＯ「ぬぬぬっ！　明らかに警戒されているのか、この感じ！？　ここは作戦を早く進めなくては！」

紗良「健一の好きな炭酸にしたんだから！　さあ！　飲んで飲んで！　ぐいっと一気に！」

健一「え？　今？　しかも一気？」

紗良「後でもいいけど、今がいいなー」

健一「なんだそれ」

紗良「やっぱり、いまがいいなー」

健一「あー。でも、俺、今、炭酸の気分じゃないんだよな。悪いけど。あとで飲むわ」

紗良「えーっ！！！」

紗良のＭＯ「私は、思わず、全力で叫んでしまった」

健一「（ビックリして）え？　どうした？」

紗良「いや……別に……」

紗良のＭＯ「な、ななんてことだあ！　今飲んでおくれよ、健一くん！　私は心の中で叫びながら、必死で平静を装った」

紗良「（甘えるように）ねえー。飲んでくれないの？　私の感謝がこもってるんだよ。そうは思わない？」

健一「えー」

紗良「逆に、おごりなんだから感謝されたいなあ」

健一「そういうの、めんどい……」

紗良「どうしてもダメ？」

健一「ダメ」

紗良「いいじゃんー。ケチな私のお願いだよ！　お願い！　お願い！　おねがーい！」

健一「ん……。全く……。わかったよ。飲めばいいんだろ！」

紗良「イヤならいいよ」

健一「ありがたくいただきます」

紗良のＭＯ「やった！　炭酸ダイナマイトが炸裂するぞ！　私は思わず、健一から一歩離れた。それなのに、健一は、ペットボトルのふたを軽く回すと、すぐしめてしまった！」

紗良「えっ……開けないの？」

健一「ん？　ああ。炭酸って、自販機で転がって出てくるだろ？　だからこうやってちょっと空けて勢い殺すんだ」

紗良「へ、へえ……」

健一「ってか、なんで一歩離れた？」

紗良「いや、別に！」

紗良のＭＯ「っていうか、そんな技があったのかあああああ！　私の心の中で不満な気持ちが爆発していた！」

（おしまい）

■「夏を感じて」

《人物》

河合　誠（１７）高校２年生。

岩永　夏子（１７）高校２年生。

《本編》

夏子「さあ。問題です！　あの雲の先には何があると思いますか！？」

誠のＭＯ「夏が間近に迫った青空に流れる、白い雲を指差しながら、高校の屋上で君は僕にナゾナゾを出した。これは難問だ！」

誠「ううん……。なんだろう……」

夏子「よーく考えて」

誠「え……ええと……。外国、とか？」

夏子「ブー」

誠「じゃあ、海とか」

夏子「ブーブー」

誠「じゃあ、山とか」

夏子「あのね……。君の回答は、ホント、夢がないよね！」

誠のＭＯ「どうやら僕の解答は彼女にとっては不正解だったらしい……。残念極まりないが、仕方ない。僕の頭では彼女の想像力についていくには限界がある」

誠「じゃあ、何が正解だったの？」

夏子「そんなのわかるわけないじゃん！」

誠「えっ……？」

夏子「わからない、が正解でーす！」

誠「そんなあ……」

誠のＭＯ「案の定、彼女の思考は、僕の想定を上回っていた。これだから、彼女と話すのは、本当に興味が尽きない」

誠「そんな回答、ズルいと思うけどな……」

夏子「だって。あの雲の先みたいに、私たちの未来だって、明日だって、今日だって、どうなるかなんてわかんないんだよ？　そうじゃない？」

誠「まあ、そう考えれば、そうかもしれないけど……」

夏子「でしょ？　明日生きてるって保障なんて実はどこにもないんだって。そう思わない？」

誠「確かに……」

夏子「でしょ？」

誠「……同意します」

夏子「よろしい。でもね、ただ一つだけ、はっきりしていることもあります！」

誠「え、な、なに……？」

夏子「これから言うことをよーく聞いてね。一度しか言わないからね」

誠「うん……」

夏子「私の大切なものはなんでしょう？」

誠「またナゾナゾ？」

夏子「答えられたら、キスしてあげる」

誠「えっ……？」

誠のＭＯ「君の提案はいつも僕の想定を上回る」

夏子「本気だよ」

誠「……そんなあ」

夏子「何？　キスじゃ、不満？」

誠「そ、そうじゃないけど！　だって……ええと……！」

夏子「必死に考えてよね。ヒントはなし、答えられるのは一回だけ」

誠「そんななぞなぞ」

夏子「さあ。考えて」

誠「ええっ……わからないよ」

夏子「本当に？」

誠「わからない……」

夏子「ファイナルアンサー？」

誠「イエス」

夏子「それが、正解です！」

誠「え？」

夏子「私の大切なもの、わからない、が正解です」

誠「どういうこと？」

夏子「さあ。どういうことだと思う？」

誠のＭＯ「そう言って、君は僕の頬にキスをした。あまりに急な展開に僕の頭はついていけない。動揺する僕を見て、君はそっと微笑んで、そして、くるりと回った」

夏子「さあ。考えて！」

誠「え……え……え……」

夏子「君の答えに期待している！」

誠のＭＯ「僕の答え。それは……。それは！　僕の頭はオーバーヒートしていた。君はもう一度、くるりと回って、そして、空を仰いだ。夏の風が僕たちを包んでいた」

（おしまい）

■「ペンギンダッシュ！」

《人物》

川口　夏美（１８）高校３年生。

木下　歩夢（１８）高校３年生。

《本編》

夏美「あぢい！　あぢい！　あぢい！」

歩夢「夏美、暑い暑い言い過ぎ！」

夏美「だって……暑いものは暑いんだもん！」

夏美のＭＯ「真夏の電車通学はホントイヤ。外は暑くて死ぬし、車内は冷房ガンガンで死ぬし。講習とか、大学受験とか、そもそも勉強とか、消えてなくなればいいのに、って思うよね。ああ、今日も電車に揺られる私たちって一体なんなんだろう！」

夏美「脳が爆発する！　歩夢、助けてよぉ」

歩夢「無理だな」

夏美「んー。電車に乗っている間だけが救いですよ。ホント」

歩夢「確かにな」

夏美「ああっ！　もういっそ、南極行きたい！」

歩夢「南極？　夏美、何言ってんだ？」

夏美「南極で、ペンギンと戯れたーい！」

歩夢「なんだそれ」

夏美「この夏の私の夢です」

歩夢「いやそれ、ただの妄想だろ！」

夏美「いいじゃん、妄想でも！　タダなんだから」

歩夢「まあなー」

夏美「南極にはね、コウテイペンギンをはじめ、様々なペンギンが暮らしているのです」

歩夢「へえー」

夏美「ほかにもね、アデリーペンギン、ヒゲペンギンとかいるんだよ」

歩夢「詳しいな。違いがよくわからないけど」

夏美「違う。違う。よく見てあげて。私、これでもペンギン博士ですから」

歩夢「そうだったの？」

夏美「可愛いよねー、ペンギン。ああ、たわむれたーい」

歩夢「夢かあ」

夏美「歩夢は？　この夏、何かするの？」

歩夢「俺？　俺は、寝袋もって自転車で北海道を一人旅する計画だけど」

夏美「え！？　なにそれ、受験生のくせに超アクティブじゃんー！」

歩夢「２週間、講習も休んで、行ってくる。ま、高校最後の夏の思い出、的な」

夏美「マジかー。なんかおいていかれた感アリアリだな……」

歩夢「夏美も夏休みなんかしたらいいんじゃないの？　ペンギンに会いに行くとか？」

夏美「うーん。でも。私は、別にいいかなー。水族館の癒し動画見てダラダラ過ごすのが理想だから」

歩夢「実際、行かないのかよ！」

夏美「冷房の切いた部屋でアイスを食べてさ。ひんやりとさあ。それが最高だよ！」

歩夢「完全インドアか！」

夏美「ホント、暑いのイヤなんだよね。ペンギンみたいに、スイスイって水の中泳ぎたいわー」

歩夢「なら、プールでも行けば？」

夏美「プールはダメ。私、ペンギンと違って泳げないから」

歩夢「そうでした」

夏美のＭＯ「彼はすっかり呆れてしまったようだけど、私は完全インドアで行く気満々なのだ。スイスイって空想の中で泳げればそれでいいのだ。なんて、そんな馬鹿話していたら、あっという間に高校の最寄り駅についてしまった。ああ、ここから灼熱の道路を１５分も歩かなければならないなんて！」

夏美「もうイヤだー。暑いの地獄だ最悪だー」

歩夢「夏美、いいから。行くぞ」

夏美「わったよ……。ちょっと待ってね」

夏美のＭＯ「私はカーディガンを脱いで腰に巻き付ける。ペンギンダッシュ、スタンバイ！」

夏美「これでよし！　歩夢、行くぞ！」

夏美のＭＯ「電車から降りて、改札をくぐって道に出る。私の全力疾走は誰にも止められない！」

歩夢「はあ？　いきなりアクティブかよ！」

夏美のＭＯ「歩夢があとから追いかけてくる。一秒でも暑いのはご免だ。それに本当は、私たちは一秒だって無駄にはできない。高校最後の夏。だから、私たちに立ち止まっている暇なんてないんだ！」

（おしまい）

■「なりきってゴースト」

《人物》

日野　孝（１６）高校１年生。

本多　芽依（１６）高校１年生。

《本編》

本多さん「（本気で）お化けだぞー！」

日野君（やる気なく）お化けだぞ……」

日野君のＭＯ「夏の夜。僕は墓地にいた。クラスの肝試し大会が強制参加なんて、最悪だ。教室の隅でボッチな僕は、案の定、お化け役を押し付けられた。他の男子たちはみんな意中の女子との急接近を狙ってギラギラしてて気持ち悪いこと、この上ない。色恋皆無な僕にはお化け役が適役なのかもしれない……とは思うけど」

本多さん「日野君！　もっとシャキッとしてよ！　みんなをとことん怖がらせるのが私たちの役目なんだから！」

日野君「は、はい……」

日野君のＭＯ「女子のお化け役はノリノリだ。クラスのムードメーカーの本多さん。ガチの白塗り幽霊メイクがコントにしか見えない。気合入り過ぎてて、正直、引くレベルだ……」

本多さん「（本気で）お化けだぞ！」

日野君「（やる気なく）お化けだぞ……」

日野君のＭＯ「やってきたクラスメイトたちを驚かせようと本多さんは必死に頑張っていた。だけど、その必死さは虚しく、みんな失笑して通り過ぎていった。本多さんはすごく不満みたいだった」

本多さん「なんで？　なんでみんな怖がってくれないの？」

日野君「さ、さあ……」

本多さん「ってか、笑うことなくない？　せめて、あっ、怖っ、って言って欲しいよね」

日野君「そ、そうですね……」

本多さん「さっきなんて、お疲れ様ですー、って！　あり得ない！」

日野君「そ、そうですね……」

本多さん「ああっ！　私、このお化け役に命かけてたのに！　今日のために超練習したんだから」

日野君「そう、なんですか……？」

本多さん「そう！」

日野君「でも……。お化け役なんて余り者の役じゃないですか……？」

本多さん「余りモノ？」

日野君「そ、そうです……」

本多さん「日野君。それは違う！」

日野君「え……？」

本多さん「みんなを楽しませる役って、最高じゃない？　私はお化け役が一番だと思うな！」

日野君「ですが、その白塗りの顔で言われましても……」

本多さん「え？　どういうこと？」

日野君「正直、怖くないといいますか、逆に、おかしいといいますか……」

本多さん「え。怖くない？　怖くないの？」

日野君「そ、そうですね……」

本多さん「えー。じゃあ、どうしたらいいのかな？　懐中電灯逆さに照らすだけじゃダメだし。ろうそく頭に巻けば、もっと怖い感じ出るかな？」

日野君「いや……ですから、そういう問題ではないというか……」

本多さん「じゃあ、どういう問題？」

日野君「それは……」

本多さん「日野君も、もっと声出してよ。私たち、お化けなんだから！」

日野君「声の問題でもない気が……。そもそも、出るとわかってるお化けなんて、怖くもなんともないと思うのですが……」

本多さん「そこを超えるのが私たちの腕の見せ所じゃない！」

日野君「そう、なんですかね……」

本多さん「そうだよ！　絶対私たちの幽霊レベルが足りないからだって！　ああ、悔しい！」

日野君のＭＯ「本気で悔しがる本多さんを見ていたら、なんだかお化け役を馬鹿にしていた自分が急に恥ずかしい存在に思えてきた。本多さんと一緒なら、僕だってできるかも……。今度は一緒に声を出そう、と、僕は心に決めた」

本多さん「あ。次が来たよ！　日野君！」

日野君「あ。は、はい！」

本多さん「（本気で）お化けだぞー！」

日野君「（本気で）お化けだぞー！」

（おしまい）

■「夏の涙」

《人物》

草薙　雅也（１７）高校２年生。

吉田　菜穂（１７）高校２年生。

《本編》

菜穂「ねえ、雅也！　本の交換こしよ！」

雅也のＭＯ「……溢れる涙を止められなかった。彼女がこの世からいなくなる。そんな夏が迫っていたなんて。あの時の俺には想像することもできなかった……」

菜穂「本の交換こ、しよ！」

雅也「え？」

雅也のＭＯ「高校の帰り。寄り道したいつもの喫茶店で。いつもの席で本を読む俺を前にして、菜穂はそう言った。全く空気を読むということを知らないよな、コイツ！」

菜穂「だから、私の本と雅也の本、交換しよ」

雅也「はあ？　なんだそれ」

菜穂「だから交換だって」

雅也「は？　意味不明。無理」

菜穂「なんで？」

雅也「俺、途中だし、いまいいとこだし」

菜穂「なんでなんで？」

雅也「ん。だから……！」

菜穂「えーっ。いいじゃん、ケチー！」

雅也「ケチで結構」

菜穂「ケチは寿命が縮むぞ？」

雅也「別にいいし。っていうか。俺の読書の楽しみ、邪魔しないでもらえます？」

菜穂「だってー。私、もう読み終わっちゃったんだよねー」

将也「だから？　交換？」

菜穂「雅也の読んでるの新刊でしょ？　まだ読んだことないヤツ。だからー」

雅也「自分の都合だろ」

菜穂「えー」

雅也「読み終わったら交換してやるから」

菜穂「今がいいの！」

雅也「無理」

菜穂「つまんないー」

雅也「急になんだよ」

菜穂「（急にしおらしく）だって……」

雅也「え……何？」

菜穂「……私の本をね、雅也が持っていてくれたら、例えば、明日私が死んじゃっても、私の存在は雅也の中で生きるんじゃないかなーって！　思ったり！」

雅也「は？」

菜穂「私の本を見れば、私を思い出す的な！」

雅也「何だそれ」

菜穂「私、誰かの記憶に残りたいんだよ。まそれが雅也じゃなくてもいいんだけどさあ」

雅也「あのな……」

菜穂「そうしたら、なんか生きている意味もあるのかなーなんて」

雅也「菜穂の呪いだな」

菜穂「ひどーい」

雅也「呪いだ、呪い」

菜穂「呪いでもいいよ。ねえ。お願い！」

雅也「本の交換？」

菜穂「そう！　その気になった！？」

雅也「ないな。俺の都合も考えてから提案してくれ」

菜穂「雅也だから、いいんじゃん！」

雅也「俺の都合は無視なのかよ……」

菜穂「私たち読書仲間なわけだし！　とびきり面白いの貸すからさあ！」

雅也「お断り」

菜穂「新しい出会いのチャンスかもよ？」

雅也「んー。ってか、お前、本に夢中になりすぎて、事故とか起こすなよ」

菜穂「は？　私そんな間抜けじゃありませんー！　もういいよ！　雅也のケチ」

雅也「ケチで結構」

菜穂「ケチケチケチー！」

雅也のＭＯ「彼女はそう言って、紅茶を飲むと、先に店を出て行った。ああ。あとで『ゴメン』のメッセージ、いれればいいか……。なんて……。あの時、なんで俺は彼女と本を交換することを拒んでしまったのだろう。その日の帰り、彼女は事故に遭い、この世からいなくなった……」

菜穂「ねえ、雅也！　本の交換こしよ！」

雅也のＭＯ「菜穂のその声、その言葉。もう二度と聞くことはできない。あの時、俺が妥協していれば、本の交換を素直にしていれば、何か違った結果になったのかもしれない、って思うと……。俺は、あふれる涙を止められなかった。今日もいつもの喫茶店で、いつもの席に座る。彼女の面影はまだそこに確かにあった……」

（おしまい）

■「真夏の紙飛行機」

《人物》

清水　拓郎（１６）高校１年生。

阿部　夏希（１６）高校１年生。

《本編》

夏希「飛んでイケーっ！」

拓郎のＭＯ「真夏の昼下がり、校庭で空を見上げて大きなあくびをした俺の後頭部に、紙飛行機が直撃した！」

拓郎「イテッ！」

夏希「（爆笑して）やば、超うけるー」

拓郎のＭＯ「その声に、思わず振り返ると、校舎の二階の窓辺でクラスメイトの夏希が爆笑していた」

拓郎「これ、夏希か！？」

夏希「みごと命中でーすね！」

拓郎「なにすんだよ！」

夏希「夏希さんの的確ショットですよ！　すごくない？」

拓郎「ふざけんな！」

夏希「ふざけてませんー」

拓郎「ふざけてるだろ！」

拓郎のＭＯ「俺は悔しくなって、紙飛行機を拾って投げ返そうとした」

夏希「あーっ！　待って！」

拓郎「いやだね！」

夏希「待って待って！」

拓郎「イヤ、無理だから」

夏希「それ、たくろう専用の飛行機なの！」

拓郎「は！？」

夏希「私からの贈り物だから！」

拓郎「意味分かんねえ」

夏希「よく考えたら、分かるよー」

拓郎「はあ？」

夏希「よーく、見てみて！」

拓郎のＭＯ「そう言われて。俺は紙飛行機をみた。たいして何のかわりも……ん！？　こ、これは！　紙飛行機を開くと、俺の答案が出てきた！？　しかも赤点の英語、７点。夏希のヤツ……そういうつもりか！」

夏希「意味、わかった？」

拓郎「お前な、俺のことバカにしてんだろ！？　そうだろ？」

夏希「外れー？」

拓郎「は？　それじゃあ、俺に何か恨みでもあるんですか！？　外れたらどうするつもりだったんだよ？」

夏希「外さないもーん。っていうか、意味わかんないの！？」

拓郎「わかんねえよ！」

夏希「ホント？」

拓郎「ホント！」

夏希「よーくみた？　よーく、よーく見てみてよ」

拓郎「は？」

夏希「んー。もう！　わかんないから、拓郎はダメなんだよ！」

拓郎「ダメダメうるせえ！」

拓郎のＭＯ「俺はなんだか悔しくなって、もう一度、答案を見た。ん……！？　最後に赤ペンで何か書いてある……。『ドゥ・ユー・フォール・イン・ラブ・ウィズ・ミー？』……は？　なんだこれ」

拓郎「この赤文字の英語、お前か？」

夏希「お、ついに見つけましたねえー」

拓郎「人の答案に勝手に」

夏希「さあ、英語７点の拓郎に果たしてこの意味が分かるでしょうか？」

拓郎「ふざけんなよ」

夏希「読解できるかな！？」

拓郎「教えろ」

夏希「教えなーい」

拓郎「くそう……どういう意味だよ！　どうせバカにしてんだろ！？」

夏希「あー。残念だねえ。やっぱ、わかんないかあ？」

拓郎「ええと……んー……んんんー！」

夏希「超ウケるー」

拓郎「教えろ！」

夏希「ホント、バーカッ！」

拓郎のＭＯ「そう言って夏希は教室の奥へ引っ込んでしまった。一人取り残された俺は紙飛行機を片手にこの英語の言葉の意味を考えた。『ドゥ・ユー・フォール・イン・ラブ・ウィズ・ミー？』。んー。さっぱりわからん！」

（おしまい）

■「今夜だけは」

《人物》

河野　椿（１７）高校２年生。

林　　順平（１７）高校２年生。

《本編》

椿のＭＯ「夏祭りが中止になった。でも、優しいあなたは、一緒に散歩してくれると言ってくれた！」

椿「今年はなんか寂しいね」

順平「夏祭りは密だからな。中止も仕方ないよ」

椿「でも。ほかのみんなも都合悪いって来れなかったし」

順平「だな」

椿のＭＯ「夜の河川敷を二人で歩く。二人きりだ！　待ちに待った、私とあなたとの二人きり！」

椿「でも、お祭り行きたかったなあ」

順平「そう？」

椿「うん」

順平「そっか」

椿「金魚すくい、スーパーボールすくい、水風船すくい」

順平「すくってばっか」

椿「あ。ホントだ」

順平「ホント」

椿「でも。食べる女の子と、どっちがいい？」

順平「え？　その質問は、ムズイなあ」

椿「やきそば、たこやき、りんご飴！」

順平「そんなに食べれる？」

椿「食べれない」

順平「じゃあ、すくってばっかりの方がいいかな」

椿「だよねー」

椿のＭＯ「あなたは優しい。遠くで花火があがる音がした気がした」

椿「（ポツリと）ああ、浴衣……」

順平「ん？」

椿「浴衣、着たかったなー、って。夏祭り気分満喫したかった」

順平「フツーでいいんじゃね？」

椿「女の子は、そういうの大事にするの」

順平「へえー」

椿のＭＯ「また、遠くで花火の音がした」

椿「あれ？　どこかで花火やってるのかな？」

順平「ああ、聞こえたよね？」

椿「うん。でも、見えないなあ」

順平「見えないね」

椿「そうだよね」

順平「そうだね」

椿のＭＯ「夜空を見回す私たちの間に沈黙が流れた。なんだかドキドキするのは私だけだろうか？」

順平「……そろそろ帰るか」

椿「え……」

順平「だいぶ歩いたし」

椿「うん……」

椿のＭＯ「もう少し。あと少しだけとは言えなかった……だから……」

椿「ゲームしない？」

順平「ゲーム？」

椿「どれだけ遠回りして帰れるかゲーム」

順平「なんだそれ」

椿「家に着かなかったらゴールみたいな」

順平「それ、帰れてないじゃん。っていうかゴールもできてないし」

椿「そっか！」

順平「そうだよ」

椿「じゃあ、ダメかな？」

順平「遠回りゲームねえ」

椿「やるだけやってみない？」

順平「よーし！」

椿のＭＯ「やっぱりあなたは優しい」

順平「本当に帰れなくならないように回るからな」

椿「私すぐ迷子になるので、道案内お任せします」

順平「おっけー」

椿のＭＯ「そして私たちは遠回りゲームを始めた。本当は、みんなを誘ったふりをしたこと。いつかあなたが気づいてくれたら、わかるかな。一緒に歩く夜の道。今夜はまだ、おやすみ、は言わない」

（おしまい）

■「あべこべ連打」

《人物》

外山　琴美（１６）高校１年生。

瀬名　航（１６）高校１年生。

《本編》

琴美のＭＯ「いつも一緒にいるのが当たり前だった。当たり前だと思って、１６年過ごしてきた。私たちは生まれたときからトモダチだった」

航「琴美！　実は、折り入って相談が……」

琴美「え？　何？」

航「俺……人生初告白されちゃいました！」

琴美「え？　マジ！？　相手は誰？」

航「それは、秘密」

琴美「私に秘密？」

航「一応、告ってくれた相手への礼儀的な」

琴美「あっそ。んで？　どうするの？」

航「それが……実は迷ってて……」

琴美「迷う？」

航「だって、俺、女子って、琴美としか主に話したことないからさ。一般女子が何考えてるか全然わかんないし。だから付き合うとか、そういうの、わかんないっていうか、考えられないっていうか」

琴美「そんなの簡単だよ」

航「え……？」

琴美「航、その事の子、好き？」

航「うん……たぶん、好き、かな……」

琴美「たぶん？」

航「好き、です……」

琴美「だったら、つき合ったらいいじゃん！」

航「でもその気持ちが本当なのか、わかんなくて……」

琴美「は？　わかんないって何？」

航「俺、好きとか言われたことないからさ。免疫ないんだよ。琴美ならわかるだろ？　助けてくれよー」

琴美「イヤです！」

航「頼むよ……」

琴美「なんなの！？　私だって、彼氏いないし。わかるわけないっつーの。ってか、自分以外、自分の気持ち、誰がわかるんだよ」

航「琴美……」

琴美「私は、航じゃないから」

航「一番近い存在だろ」

琴美「あのね……。じゃ、聞くけど。本当はどっちなの？　付き合いたいの？　付き合いたくないの？」

航「それは……」

琴美「曖昧な態度は告ってくれた子に失礼だ！」

航「本当によくわかんなくなってて……」

琴美「グズグズしない！　それなら、無理だって、さっさと返事してこい！」

琴美のＭＯ「そう言って君を突き放してしまったこと。実は、後悔しています」

航「（メールの文章で）琴美へ。相談のってくれてありがとう。あれからよく考えたんだけど。俺、やっぱつき合ってみることにする。背中押してくれてありがとな！」

琴美のＭＯ「君からのメッセージに思わず不正解ボタンを押した。ちがーう！　そうじゃない！　背中なんか押してない！　でも、そんなこと、どうしたって君に伝わるはずなかった……」

琴美「航へ。よかったな」

航「ありがと」

琴美「でも……。お前は最低だ！」

琴美のＭＯ「これが精一杯の返信であった！」

航「は？　最低って、急になんだよ！」

琴美のＭＯ「君から即返事が来る」

琴美「航、全然わかってない」

航「何を？」

琴美「わかったつもりで、何もわかってない」

航「だから、何をわかってないんだよ。わかんねえよ」

琴美「それだから、最低だっつーの！」

琴美のＭＯ「私が怒っている意味くらい、察知してほしいものだけど、鈍感男子には到底無理というものか……」

航「何怒ってるんの？　意味わかんねえ」

琴美のＭＯ「ああ。ホント。もういっそダイレクトに『好き』という二文字を送ってやろうか。でも！　やっぱり無理だ！　慌てて削除ボタンを連打する。連打したって、この気持ちが削除できるわけではないのだけれど、連打していた」　（おしまい）

■「ゴミ捨てフレンズ」

《人物》

坂井　花音（１６）高校１年生。

渡辺　良平（１６）高校１年生。

《本編》

花音のＭＯ「私の心はどこか腐っている。高校生なってしまったけれど、毎日、死にたくなるのを止められない。そんな私のことをクラスの人間たちは、ゴミ係り、と呼ぶ。真冬の寒空の下、今日も私は押し付けられたゴミ箱を持って、校舎の果ての集合ゴミ捨て場へ向かっていた……何にも抵抗しないのが私の主義だ」

渡辺「坂井！　俺もゴミ捨て手伝うよー！」

花音のＭＯ「私のあとを、一人の男子が追いかけてきた……」

花音「え？」

渡辺「ってか、坂井、歩くのはや」

花音「誰、ですか……？」

渡辺「ひどいなー。クラスメイトの渡辺だよ！　渡辺！　見たことあるだろ？」

花音「ないです」

渡辺「えー。そんなあ！」

花音「す、すみません……」

渡辺「俺のこと知らないやつがいるとは！」

花音「で。何の用ですか？」

渡辺「えっと！」

花音「私忙しいので」

渡辺「俺も、ゴミ捨て！　手伝うよ。一人じゃ大変だろ？」

花音「は？」

渡辺「大変、じゃない？」

花音「いえ。一人で大丈夫です」

渡辺「まあ、そう言うなって！　いいから、ゴミ箱、俺持つからさ」

花音「いいえ」

渡辺「遠慮するなって」

花音「結構です！」

渡辺「いいから！　貸せって！　ほら！」

花音のＭＯ「そう言って、渡辺と名乗ったこの男子は私からゴミ箱を無理やり奪い取った。なんなんだ……。この人、変だ……」

渡辺「で、ゴミ捨て場ってどっち？」

花音「こっちです」

渡辺「はいはい！」

花音「……あなた、変わってますよね？」

渡辺「え？　どこが？」

花音「全体的に……」

渡辺「そう？　ってか、坂井っていつもゴミ捨て当番だよな」

花音「それは……」

渡辺「俺、偉いなーと思ってて。ふつう、ゴミ捨てなんて、嫌がるじゃん。特に女子は。汚いし、臭いし、面倒くさいしさ！」

花音「私は別に……」

渡辺「ゴミをちゃんと捨てられる人は、心が綺麗だ！」

花音「なんですか、それ……」

渡辺「俺の名言！」

花音「え……」

渡辺「ウソ。本当は、俺のばあちゃんの教え」

花音「私、心が綺麗ではありませんけど……」

渡辺「そうなの？」

花音「そうです……」

渡辺「そうは見えないけどな」

花音「見えないだけですよ」

渡辺「え？　でも、どこが？」

花音「どこがって……。っていうか、あなた、私、クラスでなんて呼ばれているか知ってますよね？」

渡辺「ゴミ係り、だろ？」

花音「その理由知ってますよね？」

渡辺「理由？　偉いからじゃないの？」

花音「は……？」

渡辺「違うの？」

花音「あなた、バカなんですか……？」

渡辺「え……？」

花音「私が、ゴミみたいな存在だからですよ。ゴミと同じ、なんの価値もない人間。捨てられて当然の人間。そういう意味ですよ」

渡辺「はあ？　それ、誰がいってんだよ！　許せねえ！」

花音「みんな、陰で言ってますよ。知らないのはあなただけでは？」

渡辺「だったら、俺も今日からゴミ係りになるー！」

花音「え……？」

渡辺「一緒にみんなの価値観変えてやろうぜ！」

花音のＭＯ「なんなんだ、この渡辺とかいう男子。やっぱり変だ……。それなのに、彼のまっすぐな言葉は、なぜか私の心に響いていた……」

（おしまい）

■「ギリで駆け込んだトイレに貞子がいた」

《人物》

森田　貞夫（１７）高校２年生。

加藤　万里江（１７）高校２年生。

《本編》

貞夫「（必死に）やべ！　やべ！　やべえ！」

万里江のＭＯ「来る！？　きっと来る？　うう
ん……。もう来ないな。待ち合わせ場所
の東校舎の屋上に貞夫はいつまでたっても
現れない。約束したのに！　告白だって期
待したのに！　最低！」

貞夫のＭＯ「その頃、俺は人生最大のピンチ
に襲われていた！　来る、もう、来る！　や
ばい、来た！」

貞夫「（ボロボロになって）ト、トイレ……！」

貞夫のＭＯ「（切迫して）こんな日に限って、
東校舎の男子トイレの個室はどこも使用
中！　なんて日だ！　万里江から一週間前
にもらった大福を昼休みに食べのが……。
ううっ！　絶望だ！　俺はもうダメなの
か！」

貞夫「（身をよじらせて）ううっ……ああっ！
ううううっ！」

貞夫のＭＯ「そして、俺の人生がある意味、
終わった……」

万里江のＭＯ「その日の午後、貞夫は教室に
現れなかった。誰も彼の行方を知らなかっ
た。クラスでは、私が貞夫を振ったからだ
って噂になって、冷やかされるし。ホント
最悪！　貞夫め、覚えてろ！」

貞夫「万里江！」

万里江のＭＯ「帰り道、私のことを、私服に
着替えた貞雄が待ち伏せしていた。ふん！
絶対口聞いてやるもんか！」

貞夫「怒ってる？　怒ってるよな？　みんな
の前で屋上に呼び出したのに、俺、行けな
くて。俺……その実は、トイレで貞子に襲
われたんだ！」

万里江「（抑えきれず）……はあ！？」

貞夫「だから貞子に……」

万里江「いや、いやいや。もっとマシな言い
訳考えなよ！　ひどいって、ひどすぎる！
私がどんな気持ちで待ってたか！」

貞夫「マジなんだって！　ある意味、俺、本
当に死んだと言いますか……」

万里江「じゃあ、私が見てるの幽霊なわけ？」

貞夫「それは……違うけど」

万里江「ちゃんと言わないと許さない！」

貞夫「ごめん……」

万里江「言えないなら。もう話しかけないで」

貞夫「……ど、どんなことでも引かないでく
れる？」

万里江「嘘つかれるよりマシ！」

貞夫「俺、実は……」

万里江のＭＯ「そして、貞夫が語った事は、
にわかには信じられなかった。一週間前に
私があげた大福を今日食べるとか、呪いと
か。限界を超えたとか。もう笑うしかなか
った。限界超えたって……何？」

万里江「貞夫、マジなの……！？」

貞夫「マジだよ。ホント、こんなこと万里江
にだって恥ずかしくて言いたくなかったん
だけど……」

万里江「いや、一週間前の大福食べるのはよ
くないわー。そりゃ、お腹壊すわー」

貞夫「願懸けしたかったんだよ」

万里江「にしてもさあー。あー。おかしい！」

万里江のＭＯ「笑う私を前にして貞夫は土下
座をした。『許してください』ってそれがホ
ント、ツボで。私は爆笑した」

貞夫「万里江……俺、真剣なんだけど……。
許してくれる？」

万里江「うーん。どうしようかな」

貞夫「頼むよ。この通り」

万里江「とにかく、帰るよ」

貞夫「え……」

万里江「今日一日、笑わせて！」

貞夫「そんなあー」

万里江のＭＯ「歩き出す私に貞夫がとぼとぼ
とついてくる。私はこらえていた気持ちを
笑いに変える。バカな貞夫のバカな秘密。
これは、私じゃないと受け止められない
な！　全く！」

（おしまい）

■「ホウレンソウ」

《人物》

真辺　幸彦（１７）高校２年生。

町田　佳織（１７）高校２年生。

《本編》

真辺のＭＯ「ホウレンソウ。それは、報告・連絡・相談の略語。まさか、面倒くさがりの俺が、ホウレンソウをする羽目になるなんて……思いもしなかった……どれもこれもお節介な町田さんのせいだ……」

佳織「真辺君」

真辺「ん？」

佳織「また無断欠席ですよ。（顔を近づけ小声で）このままだと出席日数が足りなくなりますよ？　わかっていますか？」

真辺君のＭＯ「放課後。屋上で寝っ転がってうたた寝をしている俺のことをクラス委員の町田さんが邪魔してきた」

真辺「町田さん。顔、近い……っていうか怖い……」

佳織「だって。大事なことだから。起きてください」

真辺「めんどくせえなあ」

佳織「ちゃんと話しましょう」

真辺「町田さん……何の話？」

佳織「だから無断欠席が多いということで」

真辺「町田さんって、俺の何？　親か？」

佳織「同級生です」

真辺「じゃあ、関係ないだろ」

佳織「あります」

真辺「うーん。っていうか、俺、別に好きで高校通ってるわけじゃないんでー」

佳織「じゃあ、なんでなんですか？」

真辺「は？」

佳織「通っている理由」

真辺「理由って……それは……」

佳織「理由を教えてください。で、なければ納得できないので」

真辺「……そんなの、親への建前的な。世間体的な。だから、別に。卒業できなくてもいいっていうか」

佳織「それは、自暴自棄ですか？」

真辺「まあ……そんなとこ」

佳織「ダメですよ！　絶対ダメです！」

真辺「顔、近いって……」

佳織「すみません。コンタクト忘れたもので」

真辺「あ、そうなんだ……」

佳織「とにかくダメです！」

真辺「ダメダメ言うけど、別に、町田さんには関係なくね？　これは俺の問題っていうか……」

佳織「関係あります。私、真辺君と一緒に卒業したいです」

真辺「は？」

佳織「同じクラス委員じゃないですか」

真辺「それも俺にとっては、建前。世間体だから」

佳織「でも。委員会はちゃんと出席するじゃないですか。真辺君が真面目だってこと私は知っています」

真辺「あれは、町田さん、一人じゃ、大変だろ……」

佳織「感謝しています。私は真辺君のこと。相棒だと思っていますので」

真辺「相棒って……」

佳織「私と一緒なら、授業も出れますか？」

真辺「は？」

佳織「どうですか？」

真辺「うーん……」

佳織「では、今日から、私とホウレンソウしましょう！」

真辺「は？」

佳織「報告・連絡・相談の略です」

真辺「なんだそれ？」

佳織「真辺君と私の間でルールを決めるんです！」

真辺「ルール？」

佳織「授業に遅れるときは、報告してください。授業に遅れないようにノートとっておくんで。それから連絡ください。ノート渡すんで。もし、何か問題があれば相談してください。これで一緒に卒業を目指しましょう！」

真辺「余計なお世話」

佳織「ホウレンソウ！」

真辺「だから、顔……近い……」

佳織「す、すみません……」

真辺「……わかったよ。ホウレンソウくらいなら、やってやるよ。だからそんなじっとこっち見るな」

佳織「本当ですか！？　約束ですよ！」

真辺のＭＯ「ああ。マジか、ホウレンソウ。彼女のまっすぐな視線に、嫌とは言えない俺がいた」

（おしまい）

■「渦巻きユア・ネーム」

《人物》

井上　みちる（１７）高校２年生。

大森　久志（１７）高校２年生。

《本編》

みちる「ぐるぐるぐる。ぐるぐるぐる」

みちるのＭＯ「ボールペンで好きな人の名前をひたすらノートに書いていく。そしてインクが切れたら想いが届く。そんな都市伝説、私は信じない！　でも……」

みちる「（深くため息をつく）」

久志「みちる。またノートに渦巻き」

みちる「ちょっと見ないで」

久志「渦巻うまいな」

みちる「そこ？」

久志「ほかほめようがない」

みちる「ほめなくていいし」

久志「ってか、勉強会なんだから、集中しろよな」

みちる「気分転換なの」

久志「ぐるぐるって渦巻……みちる、頭、混乱してるんじゃねーの？」

みちる「グルグル効果を知らないな？」

久志「グルグル効果？」

みちる「そう。グルグル効果。こうやって、渦巻を書くと、頭の中スッキリするんだよ」

久志「うそくさ」

みちる「思考の整理術、なの」

久志「よくわかんないわ」

みちる「わからなくて結構」

久志「わからないといえば、問題、わかんないのあったら言えよ。せっかくの勉強会なんだから」

みちる「別に、大森に教えてもらうほどの難問はありません」

久志「俺だって、みちるに教えてもらう問題はないけどな」

みちる「お互い様だねー」

久志「だなー」

みちる「さあ、自分の世界へ」

久志「同感」

みちるのＭＯ「大森久志。それが彼の名前だ。彼は私の気持ちには全く気づいていない。いきなり私が二人で勉強会をしようと誘ったのにも何も感じていないようだ。鈍感もいいところ。この渦巻きだって、ただの落書きじゃない。都市伝説の実証実験なのだ」

みちる「ぐるぐるぐる。ぐるぐるぐる。（ため息をついて）あのさ。大森」

久志「ん？」

みちる「ここの三角関数の問題なんだけど」

久志「何？　質問？」

みちる「悪い？」

久志「悪くないだろう。どれ？」

みちる「これ。公式使えばいいんだよね？」

久志「あー。これは、そう。なんだよ。わかってんじゃん」

みちる「まあ、わかってはいたけど、確認的な！」

久志「確認ねえ」

みちる「了解ですーじゃ、戻りまーす」

久志「集中、集中」

みちるのＭＯ「彼はそう言って再びカリカリ問題を解いていく。私は渦巻を書いて、再び気持ちを整える」

みちる「ぐるぐるぐる。ぐるぐるぐる」

みちるのＭＯ「書き連ねていく渦巻、これ、実は、渦巻きに崩した、彼の名前なんだってこと。名前をぐちゃぐちゃに書いているのだということ。絶対に彼は気づかないだろう。私の思いが絶対に届かないのと同じ構造だ。世界は本当によくできている」

みちる「（深いため息をつく）」

久志「あのさ……」

みちる「なに？」

久志「いや、集中はどこへ行ったのかな、と」

みちる「私流、思考の整理だって」

久志「ふーん」

みちる「あのさ！」

久志「ん？　何？」

みちる「なんでもなーい」

久志「なんだよ？」

みちる「別に。生きてるか確認しただけ」

久志「集中」

みちるのＭＯ「鈍感な彼とのまじめな距離感。ペンのインクは切れることはないだろうし。私も自分から気持ちを伝えるつもりもない。ああ、私のグルグルは結局、どこまでもどこまでも続くのであった」

（おしまい）

■「昼下がりの天使様」

《人物》

三好　淳（１７）高校２年生。

秋元　早苗（１７）高校２年生。

《人物》

秋元さん「三好くん、映画楽しみだね」

三好くん「（緊張して）ですね！　秋元さん、本当に来てくれてありがとう！」

秋元さん「いえいえ。観たかったのだから」

三好くん「（緊張して）そっか！」

三好くんのＭＯ「いつもと違う、ポニーテールの秋元さん。学校と違って、急に大人に変身したみたいで、綺麗で、とても綺麗で……僕は、僕は！　気がついたら、電柱にぶつかっていた！」

三好くん「い、いてぇ……」

秋元さん「（心配して）三好くん、大丈夫……？」

三好くん「ご、ごめん……。前見てなかった、かも」

秋元さん「え！？　危ないなあ。電柱にぶつかる人、初めて見たよ」

三好くん「俺も……」

秋元さん「ホント気を付けてね」

三好くんのＭＯ「まさか自分がギャグ漫画のようなことになるなんて……。１７年間生きてきてこんなに恥ずかしいことはない！　あっ！　隠れて死にたい！　でも隠れる場所なんてない！」

秋元さん「三好くん？　本当に大丈夫……？」

三好くん「は、はい……」

三好くんのＭＯ「大丈夫ではない！　僕は非常に緊張していた。なぜなら、人生初デートなのだ！　映画に誘っただけだけど。秋元さんがまさかＯＫしてくれるなんて奇跡だと思った！　再び僕らは歩き始める。秋元さんの方をちらっと見る。やっぱり綺麗だ。綺麗で。綺麗で可愛い！　まさに天使だ！　そして、僕は再び電柱にぶつかっていた！」

三好くん「い、いてぇ……」

秋元さん「（あきれて）三好君。また？　どこ見てあるいてるの？」

三好くん「それは……どこでしょう……」

秋元さん「ちゃんと前見ないと……」

三好くん「方向音痴なのかな……」

秋元さん「もしかして……まわりが気になる？　私と一緒だと……落ち着かないとか！？」

三好くん「そ、そんなことは！　全然全く、ないです！　落ち着きまっす」

秋元さん「ならよかった」

三好くん「ふがいなくてすみません」

秋元さん「三好君、学校だと落ち着いてるのに。今日はいつもと違う気がするよ？」

三好くん「そうですか……？」

秋元さん「そうだよ」

三好くん「そういわれると、そうなのかも。あ、でも、秋元さんだって」

秋元さん「私？」

三好くん「その雰囲気と言いますか……髪型ですかね」

秋元さん「ああ、ポニーテールだからかな？」

三好くん「きっと……」

秋元さん「どう？」

三好くん「え……どう？　というのは？」

秋元さん「似合う、かな？」

三好くん「（照れながら）……似合うと思います！」

秋元さん「ありがと！　あ、映画遅れちゃうね！」

三好くん「そ、そうですね！　あ、今度はちゃんと前見て歩くので！」

三好くんのＭＯ「しかし、僕はもう映画館まで無事にたどり着ける自信がなかった。秋元さんがまぶしすぎて。くらくらする。倒れそうだ。すると、そんな僕を見かねたのか、秋元さんは僕の手を取った」

三好くん「え……！？」

秋元さん「心配だから。私が方向音痴くんのナビゲーターやってあげる」

三好くん「えええええっ！？」

秋元さん「いいから。ついてきて！」

三好くん「で、でも……」

秋元さん「（照れながら）もう電信柱にぶつかってほしくないの！　だから！」

三好くんのＭＯ「はにかむ秋元さんのその笑顔。ああっ……。もう何も言えない。僕は顔を真っ赤にしながら彼女に手を引かれて、人混みの中を歩いたのでした」

（おしまい）

■「白く深く」

《人物》

藤田　琴美（１７）高校２年生。美術部。

森山　トオル（１７）高校２年生。陸上部。

《本編》

琴美のＭＯ「白い吐息を漏らす。冬の夕暮れ。藍色の空。私は高校の部活帰りに、いつもの交差点でトオル君が通りかかるのを待っていた。彼のランニングコースの休憩地点が、この交差点であることを私はよく知っている。遠くに彼の姿が見えた」

トオル「（走ってきて、息を切らしながら）藤田！　お疲れ！（と呼吸を整える）」

琴美「トオル君も！　お疲れー」

トオル「今日も冷えるな」

琴美「だね。そんな中、走り込み、偉い。感心ですな」

トオル「サンキュー。藤田は？　今帰り？」

琴美「うん。展覧会終わったから。うちの部活はもう暇なので」

トオル「美術部、だったっけ？」

琴美「そうそう」

トオル「そっか。自主トレとかはやらないの？」

琴美「それは、個々人の活動だから」

トオル「そうなの？　藤田ってメッチャ画うまいイメージがあるから、すげえ練習してるんだと思ってたけど」

琴美「実は、隠れて自主練しております」

トオル「やっぱりな！」

琴美「デッサンばっかりだけど」

トオル「基本が大事なんだろ？」

琴美「うん」

トオル「じゃあ、俺と同じだな」

琴美のＭＯ「そういって、トオル君はストレッチを始めた。彼がまた走り出すまでの束の間の時間。それが私たちの交流の時間だ」

トオル「そういえば、藤田って。最近、よくこの交差点にいるよな」

琴美のＭＯ「私はドキリとした。呼吸が深くなる。吐く息が白く深くなる」

琴美「そうかな。いたら、悪い？」

トオル「いや、別に。ただ、よく会うなーって、思っただけ」

琴美「じゃあ、私の秘密教えてあげる」

トオル「何？　秘密なんてあるの？」

琴美「私、この場所のこと特別に好きなの」

トオル「え？　ここって、交差点？」

琴美「そうだけど微妙に違います」

トオル「正解は？」

琴美「ここから見上げる《空》が好きなの」

トオル「空？」

琴美「今日もスケッチしてた」

トオル「どれどれ？」

琴美「見たい？」

トオル「見たいな」

琴美「どうしようかな！？」

トオル「見せてください！」

琴美「では！」

トオル「どれどれ？　うわー。やっぱすげえうまいな。リアル、っていうか。繊細だな」

琴美「青くて白くて、広くて大きくて、あそこの空にちょうど飛行機雲も伸びてて……見える？」

トオル「あ。ほんとだ。冬の寒い空の感じ欲出てるよ。空なんていつもおんなじだと思ってた」

琴美「そんなことないんだよ」

トオル「そうなんだな」

琴美「というわけで、創作のインスピレーションを養っているというわけなのです」

トオル「ただの暇人かと思ってた」

琴美「ひどーい」

トオル「冗談。やっぱり、努力してんだな」

琴美「それほどでもないよ」

トオル「俺も頑張らないとだな！」

琴美のＭＯ「彼の休憩はそろそろ終わる。私の大切な時間もそろそろ終わる」

トオル「じゃあ、俺、戻るわ！」

琴美「うん。頑張って！」

トオル「あ。俺も、今度から、休むとき、空見るかな」

琴美「飛行機雲が見えたらラッキーだよ」

トオル「へえー。じゃあ、今日はラッキーか」

琴美「うん！」

トオル「またな！」

琴美「またね！」

琴美のＭＯ「走り去る彼の後ろ姿を見つめながら、私は、自分の息の白さがより深くなっていることに気がついた。冬の夕暮れが深い藍色に変わっていた」

（おしまい）

■「言葉にできない私たち」

《人物》

宮田　かおる（１６）高校１年生。

小林　倫人（１６）高校１年生。

《本編》

かおるのＭＯ「大体、君に好きだと言われたことがない。告白もない。でも、私たちはいつも一緒に並んで帰る。これって付き合っているとは言わないよね！？　どうなんだろう！？」

かおる「小林。実は悩み事の相談がありまして……」

小林「悩み事？　かおるが？」

かおる「その……」

小林「まさか勉強？」

かおる「違います……」

小林「だよなー。俺に聞くなら他を当たれーって言おうと思ってた」

かおる「……これ、友達の話なんだけど。その……好きな人がいてね、でも、『好きだ』って言ってくれないんだって」

小林「なんだそれ。ってか、俺に恋愛相談するなよ。他を当たれー」

かおる「小林の、意見がほしいの！」

小林「俺の？」

かおる「そう……」

小林「うーむ……他を当たった方がいい気しかしないが……」

かおる「どう、思う？」

小林「うーむ」

かおるのＭＯ「真剣に考えてくれる君のこと、好きだよ、と私は心の中で叫んでいた」

小林「その友達、欲張りすぎなんじゃね？」

かおる「え？　欲張りすぎ、って！？」

小林「その友達の好きな人は友達のこと好きなんだろ？　好きでいてくれるなら、それでいいじゃん。言葉にしてくれって言うのが欲張りかな」

かおる「でもでも。思ってるだけじゃわかんないことってあるじゃん！」

小林「そうかねえ」

かおる「そうだよ」

小林「そんなもんかね？」

かおる「そうなの。特に女子は」

小林「言葉にしたからって本当の気持ちがわかるもんでもないような気がするけど」

かおる「屁理屈……」

小林「だったら聞くけど。かおる。俺の気持ち、お前わかってるだろ？」

かおる「えっ！？」

小林「どうなんだよ？」

かおる「それは……」

小林「わかるか、わからないか」

かおる「わ、わかってるよ！　当然でしょ！」

小林「だろ。だったら、改めて言わなくてもいいんだよ」

かおる「あのさ……」

小林「なんだよ？」

かおる「そしたら。私の気持ちは？」

小林「え？」

かおる「私の気持ち、わかる？」

小林「かおるの気持ち？」

かおる「わかるの？　わからないの？」

小林「わかるよ。当たり前だろ」

かおる「あー。もう全然わかってない」

小林「なんだよ、どうわかってないんだよ」

かおる「言葉にしなくてもわかるんでしょ？」

小林「ズル！」

かおる「じゃあ、これはどういう意味でしょう！」

かおるのＭＯ「私は左手の人差し指を立てて、君に合図を送った」

小林「え。何？」

かおる「さあ。なんの合図か。さあて。どんな意味なのか」

小林「はあ！？」

かおる「小林なら、わかるよね！」

かおるのＭＯ「私の意地悪な問題に、顔をしかめた君だけど、すぐに私の左手の人差し指を右手でつかんだ」

小林「この指とまれ！　だろ！？」

かおるのＭＯ「自信満々の君の笑顔に動揺して、私の方が答えを見失っていた」

かおる「……正解、です」

小林「楽勝だな！」

かおるのＭＯ「はにかむ君の、私の指をつかんだその手は、思ったよりもあたたかかった」

（おしまい）

■「忘れられない思い出し笑い」

《人物》

大原　志保（１８）高校３年生。

谷　　啓介（１８）高校３年生。

《本編》

志保のＭＯ「楽しい思い出はいつでも思い出したくなる。高校卒業が近づいていた、冬の終わり。私と啓介は相変わらず一緒に帰っていて。それもあとわずかなんだって、楽しい時間の賞味期限に私はほんの少しの切なさを感じていた」

志保「啓介」

啓介「なんだ？」

志保「もうすぐ卒業だね」

啓介「だな」

志保「さびしくない？」

啓介「花の高校時代が終わるから？」

志保「うーん。そういうことなのかな？」

啓介「じゃあ。どういうことだ？」

志保「賞味期限が切れちゃうみたいな感じ？」

啓介「でも、人生が終わるわけじゃないぞ？」

志保「それはそうなんだけどー」

志保のＭＯ「私は啓介の顔を見た。その時、あることを思い出した」

志保「あー。超うけるー」

啓介「え？　いきなり何？」

志保「だって、うけるんだもん」

啓介「は？　なに一人でうけてるんだよ！」

志保「いや。なんでもないです！」

啓介「はあ？　まさか思い出し笑い？」

志保「まあ、そんなとこかな」

啓介「思い出し笑いするヤツって、ド変態らいしぞ」

志保「はあ？」

啓介「あ、志保、おまえド変態だったのか！」

志保「勝手に言ってろー」

啓介「なんだよ。もったいぶってないで教えろよ。何がおもしろいんだよ！」

志保「だって、言ったら、啓介絶対怒るからさあ」

啓介「はあ？　俺のことかよ！」

志保「だから言わなーい！」

啓介「気になるだろ」

志保「言わなーい」

啓介「言えって！」

志保「じゃあ、あえて言わせてもらうけど、怒らないで笑ってくれる？」

啓介「んー。いいから言ってみ」

志保「啓介さ、そのさ……思い出したんだけど。朝から、鼻毛出てるんだよね！」

啓介「は？」

志保「鼻毛！　しかも両方の穴から、ぴょーんってカールして！」

啓介「嘘だろ！　マジか！？」

志保「マジ！」

啓介「は、恥ずかしっ！」

志保「両手で隠したって、無駄だよ、無駄。もう。私の頭にしっかり刻まれちゃいました！」

啓介「そんな映像刻むなよ！　即刻、削除しろ！」

志保「あーうけるー。だって、くるくるカールオジサンじゃんねー」

啓介「くそう。言うなら、今じゃなくて、朝注意しろよ」

志保「ごめん」

啓介「マジかー。くそう。おまえはどうなんだよ」

志保「ちょ、ちょっとその顔で人のことジロジロみないでよ」

啓介「さすがに女子が鼻毛でてるわけないか。くそう。朝から気づいてたなら、朝言えよ！俺、一日恥ずかしかい顔面だったってことじゃん！」

志保「そうだねー」

啓介「あーマジか」

志保「ま、気づいたのは私くらいじゃないかな？」

啓介「ああ、最悪だわ！　ホント、隠れたいわ！」

志保「でもさ。こうして笑ったことも、もうすぐ思い出になっちゃうのかな？」

啓介「は？」

志保「もうすぐ卒業じゃん」

啓介「んー。鼻毛抜きたい」

志保「真面目な話だよ？」

志保のＭＯ「そういって啓介は、帰り道、ずっと鼻を手で隠していた。ホント、バカみたい。でも、こんなたわいもないことで笑ったことも。卒業したら楽しかった思い出になっちゃうんだろうなあ。啓介の鼻毛のことを考えながら、私はこの記憶を忘れないように大事にしまっておこうと思ったのでした」

（おしまい）

■「青空サテライト」

《人物》

木田　成美（１６）高校１年生。

星野　昴（１６）高校１年生。

《本編》

昴「成美！　絶対、今度こそ見つけるから」

成美のＭＯ「君があんまりうるさく言うから、今日も一緒に青空を見上げて人工衛星探しをする。見えないモノ探し。見つけるなんて奇跡みたいなものだって……。いったいいつになったらわかるんだ？　ああ、何やってるんだろう、私たち」

成美「本当に見えるの？　全然見えないじゃん！　いい加減、諦めろってことじゃない？」

昴「おかしいな」

成美「見えないものは見えない」

昴「いや、そんなことは……。確かに、いま、人工衛星はまさに僕らの頭上で輝いているはずだから！　絶対！」

成美「それはそうなんだろうけど。わざわざ昼間に探さなくても」

昴「夜、光ってるのが見えるのは当たり前だろ。それじゃ、ロマンがないんだよ」

成美「ロマン？」

昴「俺は当たり前じゃない時にみたいの」

成美「真昼の人工衛星ねえ。何カッコつけてんだか」

昴「おかしいなあ……ちゃんと見えるってネットには出てたんだけどな」

成美「なんでそんなにこだわるの？」

昴「え？」

成美「別に見えないからって、存在していないわけじゃないじゃん！」

昴「それは……でも、見えてない世界でも、ちゃんとそこに存在しているんだよって、証明になるかんじするじゃん」

成美「なにそれ。見えないものが見えたらいい、ってなんか矛盾してない？」

昴「ああ、タイミング悪かったのかな」

成美「無視ですか？　無理なものは無理じゃないの？」

昴「じゃあ、探さなくていいよ」

成美「それは、探しますけど？」

昴「なんだよ」

成美「だって、見えたら面白そうだし。宇宙にうかぶ人工衛星を真昼に捉える！　一応、ワクワクはする」

昴「ワクワクする？」

成美「見えないものが見えたら、向こうからも見えてるんじゃないかって気がするし、なんか奇跡感ある」

昴「だろ？　人工衛星ってさ、あの空の向こうの、見えないずーっと先で、地球の周りを回りながら米粒みたいな俺たちをずっと見守ってるんだぜ！　ホントすげえよ。奇跡だよな！」

成美「宇宙オタク」

昴「どうせ俺はキモいですよ……」

成美「キモイ、昴に付き合わされている私もキモイですが」

昴「キモイ同盟か」

成美「ま、そんなとこ？　でも、奇跡なら見たい！」

昴「俺も」

成美「じゃあ、探しますか。首疲れるけど」

昴「見上げるのって意外と疲れるもんな」

成美「あれは？」

昴「あれ？」

成美「じゃあ、それ」

昴「それは飛行機」

成美「なんだー」

昴「あ！　お、おい！　成美！」

成美「ん！？」

昴「成美！　あれだ！　あれあれ！」

成美「ん？　どれ？」

昴「あそこ！　あそこだって！」

成美「え？　あそこって？　どこだよ？」

昴「あそこだよ！」

成美「どこ？」

昴「わかんない？　ぼわっーと光って見えるの。あれだよ！　あれ！　あれが人工衛星だよ！」

成美「んー……あれは……あれこそ、飛行機じゃないの？」

昴「違うよ。不規則な動きしてるし、絶対あれだって！　奇跡だ！　やった！」

成美「マジか！」

昴「マジ！　目標達成だ！」

成美のＭＯ「喜ぶ君の横で、あれが人工衛星だって確信は持てなかった。でもまあ、君と私がこの世界のいまここにこうして存在しているだけでも十分奇跡なのかな！　ってことで今日のところはよしとしとこうか！」

（おしまい）